

外来語研究における意味分析

—「ムード」と「雰囲気」の類義分析による事例研究—

佐藤 琢三

要旨：

日本語は外来語の数が豊かであり、語彙全体における比重が高く、重要な役割を果たしている。外来語に関する先行研究も非常に活発になされてきたが、特に心理・社会的側面等から論じられることが多かった。しかし、外来語の研究が語彙の研究である以上、意味論的考察も重要な位置を占めなくてはならない。意味論的にみると、外来語とは必ずしもそれ以前から日本語の語彙の中に存在していた和語や漢語の単純な置き換えではない。本稿は外来語の意味的研究の一事例として、外来語「ムード」の意味特徴を漢語「雰囲気」との対比において明確にする。分析の結果、両語はそれぞれ次のような意味特徴を有していることを明らかにした。

「雰囲気」の意味特徴：ある対象の、その部分の総和に還元できない全体から感じとられる性質。

「ムード」の意味特徴：ある対象の、その部分の総和に還元できない全体から感じとられる、人間の情緒や感情に由来する性質。

すなわち、外来語「ムード」は他とは決して同一ではない独自の意味特徴を有し、その点に語彙における存在意義があることがわかる。

キーワード：外来語 類義関係 意味特徴 ムード 雰囲気

1. はじめに

日本語は借用語の数が豊かであり、語彙全体における比重が高い。借用語とは、漢語の他に英語、オランダ語、ドイツ語、ロシア語等の西欧語に由来する洋語をも含むものである。いわゆる外来語という概念は借用語とほぼ重なるが、狭義には西欧語由来の洋語をさし、広義には漢語をも含むものである。本稿では、外来語の概念を狭くとらえ、英語等に由来する洋語を指すものとしよう。

ある言語において外来語が豊富であるか否かは、当該の言語の形態論的特性や表記体

系のあり方などの言語構造上の諸要因に負うところが多いだけでなく、当該の言語社会の外来文化の受容のあり方に関わる問題でもある。日本語は形態論的には膠着語として位置づけられ、内容語に対し機能語が融合することなく添加される形をとるため、外来語を受容する支障は少ないと言えるだろう。また、音節文字である片仮名を有する点も外来語の受容には有利な条件である。

日本語にとって外来語とは何なのであろう。ひとつには欧米の事物へのあこがれという日本語話者の心理的な態度が外来語の受容を促進したことは間違いない。例えば、「百貨店」という漢語が「デパート」という外来語にとってかわられたことなども、何らかの意味で新しさを表現したいという心理的・社会的要因が深く関わっていると言えよう。その一方で、増加の一途をたどる外来語の氾濫とも言える状況が懸念される傾向もある。平成19年度に文化庁が行った国語に関する世論調査によると、「外来語や外国語などのカタカナ語が多いと感じることがあるか」という問いに対して86.1%の被験者が「ある」と回答し、「外来語やカタカナ語の使用を好ましく感じるか」という問いに対しては「好ましい」との回答が14.5%であったのに対し、39.8%が「好ましくない」と回答している（注1）。現代社会において、外来語は多用される傾向を示しつつも、必ずしもこの状況が好意的に受けとめられているわけではない。このような外来語の多用に対する懐疑的な受けとめ方の背景には、なぜ他に同じ意味を表す語があるのにあえて外来語が存在するのか、という考え方が広くあるように思われる（注2）。

日本語にとって外来語が何であるのかという問いに答えるために、外来語は多面的に分析される必要がある。実際に、これまで外来語は心理的・社会的観点を中心としつつ、活発に研究されてきた。しかし、外来語研究が語彙の研究である以上、当該の語が何を意味するのかという意味研究がその中心になければならない。ある事物や概念に命名がなされたとき、語は成立する。したがって、語の存在意義はその語の意味の精緻な分析なくしては成り立たない。

本稿は、外来語の意味的研究の一事例として、「ムード」の意味特徴を類義語「雰囲気」との関連において明らかにする。その結果として、「ムード」は決して「雰囲気」と等価ではない独自の意味的特徴を有することが明らかになる。すなわち、現代日本語における外来語「ムード」の存在意義が明らかになるであろう。

膨大な数に及ぶ語ひとつひとつの意味特徴を明らかにするという作業は、膨大な時間と労力を要するものである。しかし、このような理由により、外来語の存在意義を十全に理解するためには、地道な研究の積み重ねが必要である。本稿はその一つとして、「ムード」と「雰囲気」の類義関係とそれぞれの意味特徴を明らかにするものである。

本稿の構成について簡単に説明する。次節（第2節）では、日本語の外来語研究の現状を概観し、特に心理的、社会的アプローチを中心とした言語外的観点から盛んに研究されていることを確認する。次に、第3節及び第4節では外来語の意味的研究の一事例と

して「ムード」と「雰囲気」の類義関係を分析する。最後に第5節では、以上の議論をうけ、本稿の結論を述べる。

2. 外来語研究の概観

第2節では、ごく簡単にはあるが外来語研究の現状と動向を概観する。外来語研究の歴史は古いですが、ここでは主に2000年以降のものをとりあげる。

近年、外来語研究のまとまった形で出版されたものとしては、石綿（2001）、国立国語研究所（2007）、橋本（2010）、陣内・田中・相澤（2012）があげられる。このうち、国立国語研究所（2007）と陣内・田中・相澤（2012）は多数の論者が寄稿する論集の形をとるものであり、あくまで外来語の諸問題を多面的にとらえるものである。

石綿（2001）は、洋語（石綿（2001）では「西洋外来語」と呼んでいる）現状の実態と歴史について、計量的手法を用いながらまさしく総合的に論じている。個々の外来語の意味を分析する研究は含まれていないが、外来語の表記や表現等に関して「新しい事物・考え方の表現」といった心理的観点からの考察、生活・専門分野との関連などで広く外来語の問題をとらえている。さらに、英語の中の外来語、世界の諸言語への英語の影響の比較など、対照言語学的研究もなされている。また、橋本（2010）は、20世紀における新聞社説や演説の大量データを計量的に調査し、外来語の数ははじめはゆっくり、半ばで急激に、最終段階で再び緩やかに増加する「外来語増加のS-curveモデル」を提唱している。

国立国語研究所（2007）は、平成14年から18年にかけて行われた「外来語言い換え提案」に関する研究を集大成したものである。この研究は、公共性の高い媒体における外来語の使用実態や、それに対する国民の意識を調査し、難解な外来語を平易に言い換える提案をしたものである。このような研究が要望される背景としては、やはり「氾濫する外来語」が戸惑いをもって受けとめられている現実があるからであろう。この研究は、多数の論者による論集の形ながら、電子化コーパスを活用し計量的アプローチをとる点で一貫している。この中で、外来語「メリット」の意味を既存の類義語との関係から明らかにしている研究（宮田（2007））は、本稿と趣旨を同じくする研究と言うことができ興味をひかれる。また、陣内・田中・相澤（2012）は、「言語文化論的アプローチ（構造・歴史・語彙交流）」と「言語生活論的アプローチ（社会・マスコミ・教育）」の大きく2つの観点から12編の論文によって構成され、まさしく外来語研究の最新の動向を示すものである。

上述の宮田（2007）以外に、単独の論文の形で、個々の外来語の意味を扱った研究もいくつか見られる。わけても、金（2006a）は意味研究というよりも外来語「トラブル」の基本語化の過程を詳細に論じたものであるが、「トラブル」が「問題」、「いざこざ」

等の既存の語と意味的に等価ではなく、それが基本語化という過程とどのようにかかわっているかが論じられており、意味論的観点からも貢献が評価される研究であると言えよう。その他に、中道（2004）（2005）は、それぞれ外来語「サービス（する）」と「スマート」の語義について、佐藤（2012）は外来語「プライド」と「誇り」の類義関係を分析したものである。このような個々の外来語の意味特徴を明らかにする作業は、今後の研究の積み重ねが待たれるところである。

3. 「ムード」と「雰囲気」の類義性

それでは、外来語意味分析の事例研究として、「ムード」の意味特徴を類義語「雰囲気」との比較の中で明らかにしていきたい。「ムード」は英語名詞moodからの借用である。現代日本語において、辞書の項目として記載されるべき地位を確立していると言ってよいであろう（注3）。「ムード」と「雰囲気」は語種の違いを除けばほぼ置換可能であると思われることもあるかもしれないが、決してそうではないことが明らかになる。すなわち、外来語「ムード」は他のどの語とも異なる意味特徴を有するという点で現代日本語の語彙の中に存在する意義のあるものである。

両語の分析をなすにあたって、まずは共通の特徴について考えたい。「ムード」や「雰囲気」という語を使うことなく、これらの語の意味特徴を述べるのは難しいが、両者は概ね「ある対象の全体から感じとられる、その対象の性質」という意味特徴を共有していると言ってよいだろう。「ある対象の全体」というのは、これらの語はいずれも、対象を構成部分に分割してその部分の特徴に着目したり、部分の総和として全体を述べるものでなく、あくまで当該の対象全体として感じとられる性質である。例えば、ある人物の「特徴」であれば、その部分に着目して「目が大きい」、「足が太い」、「性格が優しい」などのように述べることができる。しかし、「ムード」や「雰囲気」は決して部分に特化した特徴づけではないし、部分の総和としての全体でもない。このように、「ムード」「雰囲気」は部分に還元できない性質であり、その根拠を客観的に提示することも難しい。ある対象に何らかの「ムード」や「雰囲気」があるとされる場合、その理由はその認識の主体がそのように感じたからと説明する以外に方法はない。このような意味において、「ムード」と「雰囲気」は個々人の主観の境域に属するものと受け取られる。

以下は、両語を置き換えたとしても大きな意味の違いは感じられないと、本稿の筆者が判断したものである（注4）。

- (1)a 次男と同学年の男児（10）は「明るくて元気な子だった。車が好きで休み時間によくトラックの話をしていた」と沈んだ様子で話した。別の児童やその親によると、みんなを笑わせてクラスの 「ムード／雰囲気」 を和らげてくれる子だっ

たという。(朝日新聞2010年12月31日)

- b 昨年夏に3年生が引退すると、部員は5人に。秋の大会には、野球部以外の「助っ人」に入ってもらって出場したが、冬になると、チームの「ムード／雰囲気」が悪くなった。全力で走らない。練習中に私語をする。部員不足が士気を下げているようだった。(朝日新聞2012年07月18日)
- (2) a 真冬の庭園は殺風景なイメージですが、正月は鷹(たか)狩りの実演やお囃子(はやし)などの催しがあり、華やいだ「ムード／雰囲気」に。人であふれる社寺への初詣の後は、日本庭園で一息つきませんか。(朝日新聞2010年12月28日)
- b この後、白い幕が取り払われ、幅3・2メートル、高さ2メートルの表示板が市民ら約100人に披露された。市立えきまえ保育園の園児19人も大会マスコット「ちよるる」の面をかぶってダンスを披露し、「ムード／雰囲気」を盛り上げた。(朝日新聞2010年02月09日)
- (3) a 飼育担当のAさんによると、タンチョウは一夫一婦制で、結婚には慎重という。「ムード／雰囲気」を盛り上げて結婚につなげたい」と期待している。(朝日新聞2010年12月22日)
- b 鹿児島・出水平野から移送した傷病ナベヅルを放鳥する事業は4年目。過去も野生組と一緒に大陸に渡ることが期待されてきたが、これまで6羽の放鳥ヅルは野生組と一緒に北帰行しなかった。昨季放鳥した1羽も野生ヅルとねぐらに帰るなどしたが、結局、先に単独で北帰行してしまった。今回のいい「ムード／雰囲気」に、「2羽は全然離れず非常に仲がいい。一緒に北帰行して欲しい」とAさん。(朝日新聞2010年01月07日)

上の(1)から(3)のa文については原文において「雰囲気」が、b文については「ムード」が使われている。(1)は、いずれもクラスやチームといった集団に関わるものである。(2)は、場や場所に関するものであり、(3)はそれぞれ「タンチョウ」、「ナベヅル」という鳥のつがいに関して述べている。それぞれが似たような対象について述べており、それぞれの対象の全体から感じとられるその対象の性質である。これらに関する限りは、両語ともごく自然に使用することが可能であるといえるだろう。

これらを見る限り、「ムード」と「雰囲気」は相互に置換しても大きな差は感じられない。「ムード」は「雰囲気」を単に別の語種の語に置き換えただけであるかにもみえる。次節以下では、相違点に焦点を当てながら分析を進める。

4. 両語の意味特徴と相互の関係

4.1 両語の意味特徴：本稿のとらえ方

さて、「ムード」と「雰囲気」の両語が、「ある対象の全体から感じとられる、その対象の性質」である点で共通することは前節で述べたとおりであるが、これらの意味特徴は決して同一ではない。この節ではその点を明らかにしていくが、まずは本稿における基本的方向性を明らかにするために、両語の意味特徴につき、本稿の見方を示しておきたい。本稿における「ムード」と「雰囲気」のそれぞれの意味特徴のとらえ方は次の通りである。

(4) 「ムード」の意味特徴：

ある対象の、その部分の総和に還元できない全体から感じとられる、人間の情緒や感情に由来する性質。

(5) 「雰囲気」の意味特徴：

ある対象の、その部分の総和に還元できない全体から感じとられる性質。

上の(4)(5)のとらえ方によれば、「ムード」にのみ「人間の情緒や感情」という特徴が関与しているという点で対象の性質が限定的であり、「雰囲気」においては対象の性質等にこれといった制約がない。そのため、両語の相互の置換可能性を検証していくと、純粋に意味的性質が原因で置換不可能となるのは「ムード」が不自然になる場合が圧倒的に多く、その逆はまれである。以下、この点について詳しく見ていく。

なお、本稿の目的はあくまで、問題とする2つの語の意味的特徴の異同を明確にする点にあるが、両語の置換可能性が直接的には意味的な問題ではなく、複合語の形成という形態論的振る舞いの違いによって引き起こされる場合もある。「ムード」が他の内容形態素や名詞と結合して多くの複合語を形成するのに対し、「雰囲気」はそのような振る舞いはあまりみられない。枚挙にいとまがないが、下は「ムード」による複合語形成の例である。

- (6) ムードメーカー (*雰囲気メーカー) / 新春ムード (*新春雰囲気) / 南国ムード (*南国雰囲気) / 嫌煙ムード (*嫌煙雰囲気) / 祝賀ムード (*祝賀雰囲気) / 楽勝ムード (*楽勝雰囲気) / 歓迎ムード (*歓迎雰囲気) / しらけムード (*しらけ雰囲気) / あきらめムード (*あきらめ雰囲気) / 厳戒ムード (*厳戒雰囲気) / ひな祭りムード (*ひな祭り雰囲気)

複合語の形成という点において、「雰囲気」よりも「ムード」の方が圧倒的に生産的である。「雰囲気」による複合語のもう一方の名詞は、「メーカー」のような外来語、「新春」「南国」のような漢語、「しらけ」「ひな祭り」のような和語も見られる。他方、「雰囲気」の場合、「新春の雰囲気」「しらけた雰囲気」のような句 (phrase) の形は作るが複合語の生産性は非常に低い。「雰囲気作り」のように後項が他動詞連用形で「雰囲気」がその目的語の関係で前項に位置する例もあるが、数は非常に少ない。この違いは何に由来するのだろうか。一般論として漢語は複合語を形成しないということはない。したがって、この違いが語種という点に求められるとは思われない。両語の意味の違いが何らかの形でこのような振る舞いの違いの背景となっていることは可能性としてはありえると思われるが、本稿の筆者としては現時点でその答えを持ち合わせていない。このような現象に関してはその存在を指摘するにとどめ、以下では複合語形成の問題は除外して議論を進める。

4.2 「ムード」の使用が不自然な場合

本稿の見方によれば、類義語「ムード」と「雰囲気」の関係は(4)(5)に示されるように、「人間の情緒や感情に由来する」という特徴が「ムード」のみに関与するため、「ムード」の方が使用しにくくなる場合が多い。「雰囲気」については、このような特徴が関与してもしなくても、基本的には成り立つため、「ムード」が自然であるのに「雰囲気」が不自然な文脈はあまり多くない。

まずは、「人間の情緒や感情に由来する対象の性質」という特徴を欠く場合についてみてみよう。この意味特徴はムードの基本的意味特徴であるため、これを明確に欠いた場合、「ムード」の使用は不自然となる。以下の(7)～(10)は、当該の対象において人間の存在自体が否定されており、「ムード」を使用することが難しい。

- (7) アマゾンのジャングルってどんな 【*ムード／雰囲気】 だろう。
- (8) 誰もいない砂漠は荒涼とした 【*ムード／雰囲気】 だった。
- (9) 学校での1泊2日の観測合宿も楽しみの一つ。午前3時ごろまで天文台で星を見て、教室で雑魚寝する。「夜遅い誰もいない学校って、違う 【*ムード／雰囲気】。みんなで学校探検するのも楽しい」と部長のAさん(17)が教えてくれた。(朝日新聞2008年10月01日)
- (10) 流山温泉駅はJRによる周辺のリゾート開発で誕生、函館線で一番新しい駅だ。近くには温泉やキャンプ場、パークゴルフ場など自然体験型施設が整備されている。利用者は車を使うことが多く、「無人駅なので統計はないが、駅利用者は非常に少ない」(JR北海道函館支社)。普段はひっそりした 【*ムード／雰囲気】 が漂う。(朝日新聞2012年05月20日)

「アマゾンのジャングル」「誰もいない砂漠」などといった対象において、「人間の情緒や感情に由来する対象の性質」という特徴は関与の余地がない。そのため、「ムード」を使用しにくい。また、(9)(10)は実例であるが、同様に当該の対象において人間の存在がないことが文脈の中で明示されている。ただし、当該の対象において人間の存在そのものはなくとも、人間の情緒や感情の発露が感じとられる対象においては「ムード」の使用が自然な場合もある。

(11) この店の作りは落ち着いた大人の {ムード／雰囲気} だ。

(12) 全国からジャズファンが集まる理容室が大阪市西淀川区にある。その名も「JIMMY JAZZ (ジミージャズ)」。オーナーのAさん(47)が「良いムードのお店をつくりたい」とジャズの流れるバーのような雰囲気の店を開いた。(朝日新聞2012年07月12日)

(11)における「この店(の作り)」に人間が存在していることは述べられていないが、店内の装飾等に人間の情緒や感情を吹き込むことによってそれを感じとることが可能となる。このような場合、「雰囲気」とともに「ムード」も自然である。(12)も同様である。

また、「人間の情緒や感情に由来する対象の性質」とは、基本的に主観的にとらえられるものであり、客観的な情報として共有することは難しい。したがって、客観情報が求められる場合、「ムード」は使われにくい。

(13) 逃走した容疑者はどのような {*ムード／雰囲気} でしたか?

もちろん、人間の特徴を語る際に「ムード」の使用が自然な場合もある。

(14) 彼は {ムード／雰囲気} があってとても魅力的です。

人間の特徴について「ムード」が使われる場合は、ほぼ異性としての魅力を述べる場合に限られる。もちろん、これは「人間の情緒や感情に由来する」という特徴に起因するものである。また、(14)における「雰囲気」もごく自然ではあるが、「ムード」とは異なりかならずしも異性としての魅力について述べているとは限らないようである。(15)(16)のように、異性としての魅力以外の人物の特徴を述べる場合は、「雰囲気」が使われる。

(15) 彼はいかにも将来大物になりそうな {*ムード／雰囲気} のある少年だ。

(16) たくさんのサークル勧誘を受けたんですけど、ガリ勉っほい {*ムード／雰囲気}

の人はほとんどいなかった。東大の女の子といっても、結構普通なんですね。(朝日新聞2009年04月06日)

(15) における「将来大物になりそう」という判断は、異性の魅力を感じとる場合のような情緒や感情というよりも、より理知的な心の作用を経て得られるものである。このような場合は、「雰囲気」のみが自然である。

また、このような両語の違いは、共起する語句の差にも表れる。

(17) 市が公園のバリケードを解除すると、デモの参加者らが公園に戻り始め、次々と氣勢をあげた。だが、大勢の警察官が取り囲んでおり、ものものしい {??ムード／雰囲気} が続いている。(朝日新聞2011年11月16日)

(18) イスラエル側からエzez検問所を抜け、ガザに入る。でこぼこの道を車で移動すると、目に入るのは、イスラエル軍の空爆で破壊された建物の跡だ。銃弾の跡が所々に残り、殺伐とした {??ムード／雰囲気} が漂う。(朝日新聞2012年04月06日)

(19) 図們市は日本海まで約80キロ。沿海部から遅れた東北地方の経済発展をリードする役目を期待されてきた。しかし、吉林省による経済開発区承認から20年がたったいまも、開発区には更地が広がっている。市内の鉄道駅や繁華街も、中国では珍しく閑散とした {??ムード／雰囲気} だ。(朝日新聞2012年06月25日)

「ものものしい」、「殺伐とした」、「閑散とした」という語句は、「人間の情緒や感情に由来する対象の性質」とはかけはなれたものである(注5)。

もちろん、「ムード」と親和性の高い修飾語句も多数ある。以下の例は「雰囲気」も自然であろうが、「ムード」が使われている。

(20) 「大阪都構想法案が今国会で成立した暁には、橋下さんもぜひ講師として研究会に参加してください」ランチの席で出席者の一人が依頼したが、橋下氏は確約しなかった。それでも終始、和やかなムードだったという。しかし、その2日後にはこの“密会”が大々的に報じられ、「すわ、橋下新党結成か」と永田町は大騒ぎになったのだ。(朝日新聞2012年08月31日)

(21) 突然の大阪連携案が波紋を広げたが、阿久津市長は知事の会見での発言を「本気になって取り組む決意表明と受け止めた」とし、県と連携できれば大阪案にこだわらない考えを明らかにした。市のプロジェクトチームに案の再検討を指示し、険悪なムードはひとまず収束した。(朝日新聞2012年06月30日)

(22) 1軍に今季初昇格した日にさっそく結果を出した。とはいえ、4回には牽制(け

んせい) 死もあり、「走塁ミスがあったのでうれしさは半減」と苦笑した。球団史上最悪の12連敗を喫した前夜の嫌なムードを断ち切り、15日ぶりの勝利に貢献した。(朝日新聞2012年09月27日)

(20) の「和やかな」は、複数の人物間の感情的交わりのありようが穏やかであることを意味する形容動詞(ナ形容詞)である。(21) の「陰悪な」は、(20) とは逆に複数の人物間の感情的交わりのありようが穏やかでないことを意味する形容動詞(ナ形容詞)である。(22) の「嫌な」は、言うまでもなく感情が不快であることを表すものである。これらがいずれも「ムード」との親和性が高いのは当然である(注6)。

以上のように、「人間の情緒や感情に由来する対象の性質」という特徴を欠いた場合には、「雰囲気」のみが自然であることをみた。

5. おわりに

以上、外来語「ムード」の意味特徴を類義語「雰囲気」との関連において明らかにした。本稿は両語の意味特徴を次のようにとらえるものである。

(23) (= (4)) 「ムード」の意味特徴:

ある対象の、その部分の総和に還元できない全体から感じとられる、人間の情緒や感情に由来する性質。

(24) (= (5)) 「雰囲気」の意味特徴:

ある対象の、その部分の総和に還元できない全体から感じとられる性質。

上にみるように、「人間の情緒や感情に由来する」という点に特化している点において、「ムード」は「雰囲気」と異なる(注7)。その帰結として、例えば「彼は {ムード/雰囲気} がある」と言った場合、その解釈可能性は異なる。異性に対してアピールする魅力として解釈される可能性が高いのは、「雰囲気」よりも「ムード」であろう。

外来語の問題に限らないが、語とは何らかの事物や概念に名前をつけることによって生まれるものである。すなわち、当該の言語文化圏において、ある事物や概念が一定の度合いで定着した際に語が誕生することになる。例えば、「セクハラ」と呼ばれている行為は古くから存在していたが、1980年代以降人権意識の社会的高まりによって当該の行為に命名する必要性が生じるに至り、「セクハラ」という語が日本語の語彙の中に誕生した。このように、ある概念が語として定着するには相応の理由があるものであり、語が語として定着している以上、それは決して意味なく語彙の中に定着しているわけではない。

第2節で概観したように、日本語の外来語は心理的・社会的側面を含む多方面から盛んに研究されてきたものの、個々の外来語の意味的研究は決して十分に進んでいるわけではない。日本語にとって外来語とは何であるのか。外来語の研究が語の研究である以上、これを総合的かつ十全に理解するためには、意味的研究がその軸の一つにならなければならない。おびただしい数に及ぶ外来語の意味を明らかにする作業は気の遠くなるほどであるが、一つ一つ研究を積み重ねていくことが必要であると思われる。

注1 「平成19年度「国語に関する世論調査」の結果について」

(http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/yoronchousa/h19/kekka.html) による。

注2 この意味で国立国語研究所（2006）（2007）による外来語の言い換えの提案は注目を集めるものである。

注3 言語学の専門用語としての「ムード」は、動詞の示す事態に対する話し手の心的態度、もしくは事態の事実性/非事実性にかかわる文法範疇のことであるが、このような言語学の専門用語としてのムードは本稿の考察の対象外である。

注4 本稿は朝日新聞記事データベース（聞蔵Ⅱビジュアル）から実例を採録し、各例文に掲載年月日を示している。ただし例文中に個人名（公人を除く）がでている場合はアルファベットに置き換えている。また、出典の情報が示されていない例文については、本稿の筆者による作例である。

注5 参考までに、朝日新聞記事データベース（聞蔵Ⅱビジュアル）で2001年1月1日から2010年12月31日まで10年間のデータこれらの修飾語句と「ムード」「雰囲気」の共起件数を調べた。結果は下の通りである。

	ものもの（物々）しい	殺伐とした	閑散とした
ムード	1	2	1
雰囲気	338	19	8

注6 注6と同様に、参考までに朝日新聞記事データベース（聞蔵Ⅱビジュアル）で2001年1月1日から2010年12月31日まで10年間のデータこれらの修飾語句と「ムード」「雰囲気」の共起件数を調べた。「雰囲気」とともに、「ムード」も数多く共起していることが分かる。

	なご（和）やかな	険悪な	嫌な
ムード	106	42	163
雰囲気	726	72	112

注7 本稿の考察対象とはしなかったが、名詞「空気」の比喩的用法も、ある対象全体から感じとられる性質である点で類義関係にある。「空気」と「ムード」「雰囲気」

の意義関係の詳細については別項を期さなければならないが、そもそも「空気」は対象に「場」しかとれないという点で、「ムード」「雰囲気」と大きく異なる。すなわち、「この場の空気」とは言えても、「太郎の空気」のような対象が人間等である場合にはまったく成り立たない。また、「空気を読む」という言い方が多用されることからわかるように、あくまで理的に把握される性質のものであることがうかがわれる。ちなみに、「ムードを読む」という言い方はあまり自然には感じられないことから、この点でも外来語「ムード」とは性格が異なるようである。

参考文献

- 石綿敏雄 (2001) 『外来語の総合的研究』 東京堂出版
- 国立国語研究所 (2006) 『外来語言い換え手引き』 ぎょうせい
- 国立国語研究所 (2007) 『公共媒体の外来語—「外来語」言い換え提案を支える調査研究— (国立国語研究所報告126)』 国立国語研究所
(<http://www.ninjal.ac.jp/gairaigo/Report126/report126.html>)
- 金愛蘭 (2006a) 「外来語「トラブル」の基本語化—20世紀後半の新聞記事における」『日本語の研究』 2-2 : 18-33 日本語学会
- 金愛蘭 (2006b) 「新聞の基本外来語「ケース」の意味・用法・類義語「事例」「例」「場合」との比較」『計量国語学』 25-5 : 215-236 計量国語学会
- 佐藤琢三 (2012) 「「誇り」と「プライド」—語種を超えた類義関係—」『語学教育センター論文集』 9 : 11-24 学習院語学教育センター
- 佐藤琢三 (2013) 「「センス」と「感覚」—語種を超えた類義関係—」『語学教育センター論文集』 10 学習院語学教育センター
- 陣内正敬・田中牧郎・相澤正夫 (編) (2012) 『外来語研究の新展開』 おうふう
- 中道知子 (2004) 「外来語の語義について—サービス (する)」『大東文化大学紀要 人文科学』 2004 : 259-271 大東文化大学
- 中道知子 (2005) 「外来語「スマート」の語義について」『大東文化大学紀要人文科学』 43 : 207-215 大東文化大学
- 橋本和佳 (2010) 『現代日本語における外来語の量的推移に関する研究』 ひつじ書房
- 文化庁 (2007) 「平成19年度「国語に関する世論調査」の結果について」
(http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/yoronchousa/h19/kekka.html)
- 宮田公治 (2007) 「外来語「メリット」とその類義語の意味比較—新聞を資料として—」国立国語研究所 (2007) 所収

用例出典

聞蔵ビジュアルⅡ (朝日新聞記事データベース) <http://database.asahi.com/library2/>

(本学教授)